The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国トナカイエベンキ人の社会経済変化（1960年代から1970年代後半まで）
Author(s)	思，沁夫
Citation	社会環境研究. 2001, 6, p. 45-54
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25861
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国トナカイエベンキ人の社会経済変化

(1960年代から1970年代後半まで)

国際社会環境学科専攻
思　沁夫

The Social and Economic Changes of Reindeer Evenkies

(From 1960s to 1970s)

Qinfu SI

ABSTRACT

In this thesis, I would like to present the material and data which I assembled from Evenkies. In order to despict and to analysis the socialogical and economical changes in ths in this particular region from the 60s till the end of 70s, these material and data will be amplified and illustrated accordingly.

During the 60s and 70s, due to the influences of the political revolution in China the society of Evenkies has encoutered a great change ever since. In my opinion, the various radical political movements in that particular period have manipulated and distorted the entire structure of Evenkies, which has caused the lost of its function and identity as a complete and independent entity.

KEY WORDS

Reindeer Evenkies, People's commune, the Great Culture Revolution of China

はじめに

1960年代から1970年代にかけて，中国全土はさまざまな政治活動に覆われ，社会全体が激しい変動のなかに置かれていた。中国で「動乱の時代」と言われているこの時期に，中国の国家の政治，経済，社会システムが大きく変化したばかりではなく，大勢の人たちの生命と財産が破壊され奪われ，人々の文化，信仰，習慣，精神，人格までが大きな試練を受けた。この意味ではトナカイエベンキ人社会も例外ではなかった。しかし，地域的なバリエーションがないわけでもないし，民族，集団，個人によって政治運動から受けた影響も異なるだろう。また，さまざまな政治運動に巻き込まれた人々の立場，態度，認識，感情，要求も一様ではなかった。1981年に中央が「建国以来の党の若干の歴史問題に関する決議」[注1]を発表してから，中国国内の「動乱の時代」についての研究がスタートしたといえる。1970年代後半から1980年代にかけて，「動乱の時代」は映画，文学，テレビなどさまざまなマス・メディアを通じて報道され，中央政府と地方政府は政策，社会制度の面でも「社会遺留」問題として積極的に取り込んできた。また，中国の外国人研究者にたいする「門戸開放」(まだ十分とは言えないが) によって，外国の研究者（日本，アメリカやヨーロッパなど海外で勉強，研究している中国人の研究者も含め）の現地調査に基づいての研究が可能となっただけでなく，『チェン村』，『劉堡』などのような優れた民族誌的研究も現れている[注2]。しかし，いまの研究状況から見て，少数民族の立場に視点をあてた研究はまだ非常に少ないといわざるを得ない。このような現状は主に政治上の理由と文献資料の質にかかわる問題と考えられる。政治問題として

まだいろいろな「禁区」があり，またこの時代の文献資料の真偽の選別や調査によって得られたデータが事実に合っているか確認し，そして両者をつなげて行くことは簡単ではない。

この論文の目的は，筆者が1996年から2000年にかけて行なった現地調査（合計８か月間）での聞き取り調査の結果と，そこで得られた地方誌，地方政治の調査報告書，档案資料に基づいて，1960年代から1970年代後半までのトナカイエベンキ人の社会経済の変化を記述し分析することである。本論文で利用する聞き取り調査のデータは，定住化，文化大革命などを経験したトナカイエベンキ人18人，当時の国の政治を実施する立場にあった地域の幹部４人，そして，1960年代後半に定住村に移住してきた漢人，エベンキ人，ダフール人など若干名から得られたものである。筆者はこれまで19世紀から20世紀50年代後半までのトナカイエベンキ人社会の変化を文献資料を中心に整理し記述してきた[注3]。この論文はそのつづきでもある。

１．民族郷の移転

1950年代後半，中国の政治方針は「左傾路線」へ変わり，「一歩登天」，「走って社会主義に入る」というような人民公社化の風潮が中国全土に広がりつつあったが，トナカイエベンキ人の「特殊性」（原始社会）や「偏僻地」という地理的な要因にもより，奇乾エベンキ民族郷（以下「民族郷」と略す）は人民公社化されなかった。しかし，1960年代に入って，中国とソ連の友好関係は急に悪化し，それによって，中国とソ連の国境線であるアムール川周辺は緊張関係に包まれた。このような国際関係の変化はトナカイエベンキ人社会に大きな影響を与えた。トナカイエベンキ人はかつて「ロシア側の住民」で，1960年代初頭にもなおロシア人と接触があり，ほとんどの人（特に成人男性）がロシア語ができ，ロシア人に親近感をもっているという理由から，政府側に戦略上「不安定な存在」と見なされた（額爾古納右旗史誌弁　1997年　P.137)。

１）「吉米徳事件」

1964年11月に奇乾民族村で「吉米徳事件」（ジミド事件）が起こった。吉米徳事件の概要は以下の通りである。あるトナカイエベンキ人の子供が重病にかかり，命が危険な状態にあった。民族郷の合作社の主任を努めるトナカイエベンキ人出身の幹部は軍のヘリコプターを呼んで海拉爾に送るか，それができなければ，川（アムール）の対岸のロシアの町に行って治療を受ける必要があると主張した。漢族出身の幹部がそれに反対したため，争いとなり，トナカイエベンキ人出身の幹部は相手に射殺された。当時の中国の政治ムードの中で事件は「叛国投ソ案」という政治レッテルを張られて，殺された幹部の家族とその親戚は「反革命分子家属（家族)」，ロシアのスパイの罪名を負い「重点教育改造対象」に指定された[注4]。事件の真相は直ちに地方政府によって封じられたが，「事件によってトナカイエベンキ人は弾圧を受ける」，「トナカイエベンキ人はいつかロシアに逃げるつもり」というさまざまなうわさは民族郷の住民やトナカイエベンキ人のあいだで広がった。事件発生後まもなく，地方政府は事件の影響を沈静し，国家の「国防の安全」を守るために，民族郷とトナカイエベンキ人を「内遷」（国境から離れた地域への移転）させることを決定した（額爾古納右旗史誌弁　1997年　P.221)。

1964年政府は額爾古納左旗の森林開発によってできた町阿竜山で，招待所，診療所，食堂などを建設し新しい民族郷の所在地にしようと考えたが，1965年５月25日計画を変更し，最後は林業局が建設中の満帰という町に民族郷を設けた。同年の９月，敖魯古雅（現在の民族郷の所在地）で，トナカイエベンキ人を定住化させるために，30軒の木造の家を立てた（根河市史誌編纂委員会　P.511)。森を切り開いて作られたこの村は，トナカイエベンキ人が定住化させられた場所になっただけではなく，さまざまな政治試練を受ける舞台にもなった。

民族郷の移転は距離から見てわずかで（直接距離は90キロメートルぐらい)，行政管理組織は額

表１　民族郷の人口変化

年度	1965	1970	1975	1980
郷の総人口	126	317	375	470
馴鹿エベンキ人の人口	126	172	160	164
馴鹿エベンキ人の民族郷の総人口に対する割合(%)	100	54	43	35

出所：敖魯古雅鄂温克民族郷 P.2

爾古納右旗から隣接の額爾古納左旗に変わったとはいえ，もともと森のなかではトナカイエベンキ人の移動を制限する境界線はなく，どちらの地域も彼らの活動範囲内にあった。移転地周辺のたくさんの山，川などには移転する前からエベンキ語の地名が付けられていた。しかし，民族郷の移転はトナカイエベンキ人にとってロシアと歴史的につながりがあり，その文化が濃厚に残っている地域から，漢民族が中心である地域に生活の場を変えられたという点で大きな意味をもっていた。

２）定住村（民族郷）の人口の変化

表１は戸籍を基づいての統計である。実は1965年に定住村には126人のトナカイエベンキ人以外に16人の「社会主義教育工作隊」（社教隊）の幹部が滞在していた。また，移住してきた人口の80%以上が漢族である。年代から見ると，定住村の「外来人口」は1967年文化大革命が始まってから急速に増えた。その内訳は①民族郷の建設のために，地方政府に派遣されてきた幹部，サラリーマン，教師やその家族，②トナカイエベンキ人との通婚によって移住して来た人，（たとえば1964年までトナカイエベンキ人の中でエベンキ民族以外の民族と結婚した家庭は４であったが，1979年には24となった。）③中国で「盲流」[注5]といわれる人たちの移民などが挙げられる。

２．政治思想教育の強化

１）狩猟民大会

1953年黒竜江省呼瑪県の領域で大きな火事が発生した。政府は火事の原因はトナカイエベンキ人が野性動物を追い払う[注6]ための火から発生したと判断し，この事件をきっかけにトナカイエベンキ人の「森林防火」意識を高めるキャンペーンを行うことを決定した。キャンペーンは年に２回春と秋に，トナカイエベンキ人全員を一か所に集め，「狩猟民大会」の形式で実施された（額爾古納右旗史誌弁　1992年　P.210～211)。しかし，中国の政治ムードの変化に伴って，狩猟民大会は「森林防火」教育から「辺境治安」教育，さらに1960年代に入って「政治思想」教育とその内容を変えていった。狩猟民大会に参加するために来るトナカイエベンキ人の心情は一様ではなかった。かつて，トナカイエベンキ人が集まるのは町で交換する時と祭りの時だけであった。そのような「祭りの気分」で来る人もいれば，植民地時代の「特殊訓練」[注7]の記憶がまだ残っている人たちのなかには，「不信感」を抱く人もいた。狩猟民大会は政府の幹部たちがトナカイエベンキ人に政府の政策，決定を告げ，政治思想の教育を行う場となり，政府と幹部の「権威」を樹立させ，主流社会の価値観，文化を誇示する役割を果たしていた。狩猟民大会に何回も参加させられたＡさん（1999年当時71才以下同じ）は自分の経験を「狩猟民大会はわたしたちエベンキ人がボグド語（漢語）を学ぶ場でもあった。会議はいつも幹部たちが漢語で話した内容を少し漢語ができるエベンキ人が通訳する形で進められていた。エベンキ語にない政治用語，行政用語は，通訳はそのままでちょっとエベンキ語風に発音して伝えていた。いつの間にか私たちの言葉にそのような単語が増えていた」と語っている。幹部たちが政策，決定を読み上げ，それを通訳して分からせるという形式は，トナカイエベンキ人に，国家のイデオロギーだけでなく権威のモデルを示すことでもあった。

２）「狩猟地区の社会主義工作隊」（略称社教隊）

1960年代に入って，内モンゴル自治区で「社会主義教育」政治運動が広がった。同じ時期に，中ソ関係が緊張状態になったという背景下で，「吉米徳事件」が発生したことをきっかけに，呼倫貝爾盟共産党委員会は内モンゴル自治区共産党委員

会の要請も受け，トナカイエベンキ人に「愛国主義，社会主義，民族政策」の教育を実施するため，社教隊を現地に派遣した。少数民族出身の幹部を中心に構成された16名の社教隊のメンバーは1965年の春に現地に入った。社教隊のメンバーは額爾古納左旗政府の新しい民族郷の建設に協力しながら，「上山」という方法を導入した。すなわちメンバーを4～5人の小グループに分けて各ウリロン（キャンプ地）に派遣し，トナカイエベンキ人と「同食同住」をしながら社会主義政治思想教育を進める方法であった。当時社教隊のメンバーだったBさんの話と社教隊が呼倫貝爾盟に提出した最終報告書によると，社教隊は社会主義政治思想教育の面では，吉米徳事件を，トナカイエベンキ人の要求を応じて，政治事件として扱うことを中止し，「喧嘩によって発生した意外偶発事件」と見直しした。マルクス主義，毛沢東思想の無神論思想を広め，トナカイエベンキ人の「迷信活動」（主にシャーマン儀礼を指す）を停止させた。トナカイエベンキ人の中から社教隊に積極的に協力した4人の青年を民族幹部として育て，トナカイエベンキ人の中で，特に20代，30代のトナカイエベンキ人の中に，共産党，人民政府に接近し，そのために働くことはもっとも将来性があるというムードを作った。行政面では，額爾古納左旗政府と共にトナカイエベンキ人の定住村の生産活動を組織，管理し，党や政府の政策を実施することを通じて，国家の行政システムの最末端組織である村（定住村）の基盤を築き上げた。

トナカイエベンキ人のCさん（女性，92才）とDさん（男性，69才）の話によると，民族郷が移転してからは外との接触の機会が多くなった。定住村でいろいろな人とあったり，政府の幹部がキャンプ地によく来たりしていた。また，「全国の各民族から学ぶために」と，彼らは地方政府に率いられて海拉爾，呼和浩特，北京などに見学にも行った。しかし，彼らの生活には大きな影響はなかった。キャンプ地のほとんどの人は漢語を分からないため，幹部とうまくコミュニケーションが取れなかった。また，社教隊が組織した「政治学習会」にも，多くの場合は森にいてトナカイの放牧と狩猟をしていたため，参加できなかった。一方，吉米徳事件は見直しされたとは言え，この事件で殺されたトナカイエベンキ人の家族と親戚は度々社教隊に呼び出されて，自分の考えと認識を報告し，政治的説教を受けることを強いられた。

1966年になって，社教隊のメンバーのうちの何人かは額爾古納左旗政府，民族郷政府の幹部となり，ほかのメンバーは元の組織に戻るか，あるいは別の地域に行って仕事するようになったので，社教隊は事実上解散した。1966年秋，額爾古納左旗政府が派遣した社教隊がその仕事を引き継いだ。「上山」という方法も維持された。1968年に現地で「文化大革命」が始まり，社教隊は「革命委員会」によって解散された。これは1つの政治運動が終わり，もう1つの政治運動が幕開けしたことを意味する。

3）漢語の普及とトナカイエベンキ人の姓名の変化

Eさん（女性，50才）の話によると，1960年代前半まではトナカイエベンキ人の中で漢語をできる人はわずかであった。不完全な推測であるが，1970年代後半の時点で程度の差はあるがトナカイエベンキ人の約80%が漢語を話せるようになり，約20%の人が漢語を書けるようになった。彼らはトナカイエベンキ人社会における漢語の急速な普及の原因は学校教育の導入や漢語によるイデオロギー教育にあると見ている。

トナカイエベンキ人社会には1953年に地方政府によって学校教育が導入された（思沁夫　1999年P.178）。1969年に地方政府は定住村に「民族小学校」を設立し，3人の教師を派遣した。生徒全員がトナカイエベンキ人の出身であった。生徒数は13～14人と言われているが，統計がないため正確な数字は分からない。1972年までには学校の規模が大きくなり，5つのクラスの生徒数は54人で，そのうちエベンキ人出身[注8]の生徒は45人に達し，教師も3人から9人に増えた。1976年には学校は民族小学校から民族学校と変わり，中学校のコースが設けられた。生徒数は107人で，そのうち，

エベンキ人出身の生徒は69人であった（根河市史誌編纂委員会P.636～637)。学校は設立当初から全国統一教材を使い，漢語で授業を行っていた。

かつてトナカイエベンキ人はロシア人の教会で洗礼を受け，名前をもらっていた。1960年代に入ってから政治イデオロギーの圧力と急速に増える漢人の影響を受け，トナカイエベンキ人の姓名はロシア風の名前から漢語の名前へと変わっていった。具体的には，氏族の名称を基に漢姓が作られた。例えば，ソロゴン氏族出身の人は「索」(suo) を，クテリン氏族出身の人は「古」(gu) を，カルタクン氏族の出身者は「何」(he) を名字にした，といった具合である。名前は時代によって変わるが，1960～1970年代に生まれた人は「革命」,「文革」,「衛東」のような，当時の政治状況または政治スローガンを反映した名前が多かった。

3．経済体制の変化とトナカイエベンキ人の対応

1967年まで，トナカイエベンキ人はさまざまな形で入ってくる党の幹部らを通じて，地方の党の組織や行政管理システムに組み込まれていたが，移動しながら狩猟活動とトナカイ放牧を営むトナカイエベンキ人の生産活動を党組織が直接管理することはなかった。しかし，1967年になって，同じ地域の町，村に比べてだいぶ遅れたとはいえ，「人民公社化」の嵐はこの「偏僻地」にも吹いてきた。同年の4月1日民族郷は人民公社となり，その下位組織として東方紅狩猟業生産隊（以下生産隊と略す）が設置された（根河市史誌編纂委員会　P.118)。民族郷における人民公社化の具体的な内容は①それまでトナカイエベンキ人が個人，家族で所有していたトナカイと銃を公有化し，その所有権を生産隊に移すこと，②狩猟や放牧を「計画」にしたがって行い，定めた目標の生産高を達成すること，③分配形式としては「工分制」[注9]を導入することである。

1）トナカイの集団化と鹿茸の商品化

生産隊が成立すると強制的にトナカイの公有化が行われた。国は25～35元の価額でトナカイエベンキ人からトナカイを買い取った（敖魯古雅鄂温克民族郷　P.5)。これはトナカイの所有権がトナカイエベンキ人から国に変わったことを意味する。また，トナカイの放牧も賃金労働となった。つまり，キャンプ地にいる放牧者は1日10「工分」[注10]を得られるが，キャンプ地から離れたら「工分」は無くなる。「工分」は年末に人民元に換算され[注11]，「分紅」（一種のボーナス）という形で彼らに渡された。しかし，放牧作業は集団化以前と同じで，トナカイエベンキ人の女性たちを中心に各自のウリロンで行われていた。トナカイの利用についても同じである（思沁夫　2000年(B)　P.10～11)。

民族郷がまだ奇乾町にあった1961年から1963年の3年間，政府の指示でトナカイの鹿茸を切る作業が行われていた。その後は政府の政策によって停止されたが，1960年代後半になると，すべての

表2　1967～1979年までの東方紅生産隊の鹿茸による収入

年代	鹿茸生産量(kg)	価格(元/kg)	収入(元)
1967	275	35	9,625
1968	300	35	10,500
1969	325	35	11,275*
1970	275	35	9,625
1971	370	35	12,950
1972	410	35	14,350
1973	331	35	11,585
1974	385	35	13,475
1975	335	35	11,725
1976	312.5	35	10,937.50
1977	302	35	10,570
1978	665	35	23,240*
1979	577.5	35	20,232.50*

出所：赧時遠，敖魯古雅鄂温克民族郷

注：*マークが付いている所の数字に誤りがあるが，誤りが生産量であるのか，収入であるのか不明なので，そのまま引用する。

社会実践活動の意義はその革命性や政治性にあるという中国全土に巻き起こった革命最優先論の風潮の中で，鹿茸も「革命生産」を運営する上で欠かせない材料（漢方薬の材料）として，それを「医薬部門」に提供することが生産隊の「政治任務」となったため，鹿茸の商品化が再開された（赧時遠　P.39)。

表２は1967年から1979年までの生産隊の鹿茸の生産量とそれによる収入を示す表であるが，ここからわかるように1967年鹿茸生産が再開してから1979年までの13年間の間で鹿茸（加工済み）の単価は一度も変わったことがない。しかし，その原因は「政治任務」だったことになるのか，計画経済にあるのかはまだ不明である。ここでいえることは市場原理が機能していないことだけである。またこの他に表２からわかることは，鹿茸による収入は生産隊の安定した収入源となったことである。民族郷の統計によると，1967年から1979年まで鹿茸による収入は生産隊の総収入の25%～50%を占めていた（敖魯古雅鄂温克民族郷　P.10)。

作業は毎年の春から夏にかけて，２～３人の技術者の指導のもとで，トナカイエベンキ人の女性を中心に行われていた。鹿茸の収入は生産隊のものであり，彼女らは１日出勤すれば１日分の「工分」が得られ，放牧費と同じく年末に現金で支払われた。このようなやり方は1980年代初頭に導入されたトナカイ放牧の「生産責任制」の導入まで続けられた。

トナカイ飼育が集団化されてから，地方政府はトナカイエベンキ人の鹿茸の「産量」を上げることを「政治任務」として要求した。また，トナカイエベンキ人の収入も増えた。しかし，1960年から1980年の20年間にトナカイの頭数は1960年の629頭から1980年の887頭まで，つまり258頭しか増えていない（赧時遠　P.38)。専門家たちは，放牧域の生態条件，管理条件の向上（２人の専門獣医が配置されていた）などから，この20年間にトナカイの頭数は2,000～2,500頭まで増える可能性があったと見ていた（額爾古納左旗林業局　P.34)。それではなぜこの可能性は実現しなかったか。筆者は彼らの生業経済の仕組みが，生産隊による「任務」の押しつけにもかかわらず機能し続けたことによるのではないかと考えたい。つまり，当時トナカイエベンキ人はトナカイを商品生産のための動物と考えずに，移動する時や獲物を運ぶための運搬手段として，または自家消費する乳用の動物と考えていた。トナカイエベンキ人の経済はなお狩猟が中心であった。いいかえればトナカイエベンキ人の生活する地域には狩猟を中心にした生活を維持する自然条件があったことと，トナカイエベンキ人の人口の８割以上が狩猟とトナカイ放牧とかかわっており，それゆえ「伝統文化」の役割もある程度維持されていたと考えられる。

2）「工分制」と計画的狩猟

1967年に地方政府の要求下で，生産隊は各ウリロンに「狩猟生産工分制」を導入した。狩猟活動では出勤日によって工分が得られるのではなく，獲物の数と種類によって工分が記入されていた。工分制と同時に計画的に狩猟活動を行うことが決められた。つまり，毎年地方政府は計画書を作り，生産隊に１年間の狩猟生産の「任務」（ノルマ）を命じる。生産隊はそのノルマを各ウリロンに分担させることであった。社会主義制度の優越性と毛沢東の思想の偉大さを誇示するため，ノルマは毎年高くなっていた。工分制と計画的狩猟は1978年まで続けられた。しかし，狩猟活動がいつどこでどのような方法で行うかは各ウリロンに任されていた。また，トナカイエベンキ人が「狩猟は神の恩恵とハンターの腕を頼るしかない。計画書があっても動物があらわれない限り，我々は待つしかないのだ」と言ったように，計画書によってトナカイエベンキ人の狩猟活動が大きく変えられたことはなかった。

この時期，トナカイエベンキ人の生業経済にはいろいろな新しい要素が加えられたが，トナカイ放牧にしろ，狩猟活動にしろ，政府は実質的にトナカイエベンキ人に任せていたため，トナカイエベンキ人の生活は1950年代とあまり変わらないまま維持されたといえる。例えばハンターのＦさん（68才）は「わしたちが食べる肉の量は減らなかっ

た。エベンキ人にはものを皆で分けて食べる習慣があるので，キャンプ地から民族郷に戻る人は皆民族郷に住んでいる家族や幹部たちにたくさんの肉を持ち返っていた。」という。

4．「文化大革命」とトナカイエベンキ人社会

内モンゴル自治区の「文化大革命」運動は全国と共通するものが多いが，独自のものもあった。それはウランフを党首とした「内人党」[注12]勢力を党の組織，政府部門から摘発，追放することである。1967年の年末から1968年の６月にかけて，中央の命令によって成立した「革命委員会」は全自治区のすみずみまで広がった。全ての権力は革命委員会に集中され，かつての党の組織，政府は機能停止した。革命委員会の成立より少し遅れて，1968年１月18日に自治区レベルで「ウランフの“流毒”（悪影響）を追い払う人民戦争を展開しよう」という政治運動の目標が立てられると同時に，７月に各盟，旗から人民公社までその政治運動の目標を実現させるための組織が革命委員会の下に作られた（内蒙古自治区党校　P．153～158）。

1）「階級闘争」と「伝統文化」の排除

1968年５月に額爾古納左旗でも革命委員会（以下旗委員会と略す）が成立したことによって，この地域における「文化大革命」運動は幕あけした。同年７月に旗委員会が派遣した人たち（以下現地の呼び方にしたがって「工作組」と略す）が民族郷に到着し，民族郷でも「文化大革命」運動が開始された（根河市档案局　P．2）。

工作組は集団化されたときに登録された財産を基準に，トナカイエベンキ人を「最も貧しい狩猟民」，「貧しい狩猟民」，「搾取階級」という３つのカテゴリーに分類した。搾取階級に分類された人達は批判闘争の対象にされた。農村のやり方をそのまま「階級性」が存在しないトナカイエベンキ人社会に適用した結果，大きな混乱を招いた。「階級概念」の理解に苦しむ彼らは，かつて猟場をめぐる争いで生じた恨みと結び付けて理解しようとし，それが内部の「流血事件」まで発展した。また，ソルグン氏族の４世帯の人たちは混乱から逃れて森に入り込み，８か月間民族郷に戻らなかった。工作組はトナカイエベンキ人，特にリーダー，シャーマン，幹部になったひとたちを「財産」基準と別に開放前（1949年前）の政治背景，特に日本人やロシア人と関係があったかどうかを基準に「日本のスパイ」，「ロシアのスパイ」，「反動上層」のカテゴリーに分類し，そのうち，共産党の幹部になった人達にはさらに「内人党」（民族分裂主義者）というレッテルを貼って，本人はもちろんのことその家族まで「批判闘争」の対象にした。

また，「政治闘争」運動と同時に展開された「破旧立新」（古い文化を捨てて，新しい文化を取り入れる）運動で，最も被害を受けたのはシャーマンたちであった。当時政府の「思想教育運動」に影響され，ほとんどのシャーマンは活動を停止していたが，シャーマンを支持していた５人（女性３人，男性２人）のトナカイエベンキ人は儀礼に使う服装，道具などを強制的に工作組に取りあげられ，数えきれない「政治洗脳」を受けた。批判対象になったのはシャーマニズムだけではなかった。民族固有の服装，習慣も「旧文化（古い文化）」として批判された。さらに神話や物語などは「迷信のもと」と見なされ，語ることが禁じられたという。

トナカイエベンキ人の話によると，「工作組」はトナカイエベンキ人，特に政治的に遅れていると見なされたトナカイエベンキ人をいくつかの「学習小組」（学習グループ）に分けて，毎日の朝と晩２回と彼らに毛沢東の語録の学習をさせた。自分が分担された部分を暗記できないと，毛沢東，革命にたいする「不忠」（忠誠心がない）と判断され，厳しく批判闘争されることになっていた。ほとんどのトナカイエベンキ人は漢字が読めないため，たくさんの人が語録の学習でつらい思いをさせられた。

民族政策の面においては，1950年代後半から強まっていた「左傾」思想の影響は，文化大革命の時さらにエスカレートし，「民族融合論」，「民族

地域解体論」が主導地位を占めるようになった。1968年に満帰エベンキ民族郷の「エベンキ民族」という文字が削除され，満帰は一般の行政単位となった。1969年に内モンゴル自治区は「解体」され，呼倫貝爾盟（行政的に満帰は呼倫貝爾盟に属する）は黒竜江省に分断された。ただ，1973年に中央が政策の見直しを行なったため，同年の6月に黒竜江省は民族郷制度を復活し，民族郷の所在地を満帰から敖魯古雅トナカイエベンキ人定住村に移すことを決めた（赧時遠　P.11)。

今日「文化大革命」はトナカイエベンキ人にとって遠い「歴史の記憶」になりつつある。大勢の人が動員され，たくさんの財力，エネルギーを使い，トナカイエベンキ人の頭に叩き込もうとした「階級論」，「政治思想」などは，1978年に党と国家の政策の変化によって「全面的に否定」された。トナカイエベンキ人は6人の「頭面人物」（リーダーたち）と5人のシャーマンをはじめ，ほぼ全人口が政治運動に巻き込まれ，さまざまな体と精神の傷を受けた。命を落とした人さえいた。また，トナカイエベンキ人のアルコール中毒，自殺などの「社会問題」もこの時代を通じて，深刻化したと言われている（赧時遠　P.55)。現地ではトナカイエベンキ人が経験した「動乱の時代」を「断絶の時代」とも表現している。一般的には，この表現も「動乱の時代」と同じ意味で，当時の「政治運動」を指している。しかし，筆者は断絶という意味をこの十何年間でトナカイエベンキ人の「伝統文化」が否定され，壊されたため，それ以前の時代に生きてきた世代とそれ以後の世代の間に，同じ価値観に基づいて対話することが不可能となったことと理解したい。

5．まとめ

1）居住地域と生活の場の変化

民族郷が強制的に奇乾村から満帰町，そして敖魯古雅へと移転されたことによって，トナカイエベンキ人の生活の場も歴史的につながりをもっていた地域から，漢人文化を中心とした地域へと変えられた。1965年に定住村が建設され，定住化が強いられることによって，トナカイエベンキ人の生活のスタイルも大きく変わった。1960年代初頭までトナカイエベンキ人の90%以上の人は森の中の移動生活をしていたが，1970年代以降は生活の場の中心は各キャンプ地から定住村に移り，少数の定住生活に慣れない年寄り，ハンターやトナカイ放牧者を除いて，トナカイエベンキ人のほとんどの人は定住村で生活するようになった。多くのトナカイエベンキ人にとって，家はキャンプ地のテントではなく，定住村の木造の家，あるいはレンガ造りの家となった。

2）人口構成の変化

表1が示しているように，定住村が作られた当初には定住村の常住人口はトナカイエベンキ人しかいなかったが，1970年代後半になるとトナカイエベンキ人の人口は定住村総人口の半分にも満たなくなった。

民族郷の統計によると，1979年の時点でトナカイエベンキ人社会の内部の人口構成は以下のように変化した。ⅰハンターとトナカイ放牧者は30人前後となった。ⅱ15人のトナカイエベンキ人は幹部やサラリーマンとなった。ⅲ外部へ行ったトナカイエベンキ人は19である。ⅳ漢人，ダフール人，モンゴル人などの他の民族と通婚した家庭はトナカイエベンキ人の総家庭の半分以上を占める。

3）ことばや習慣などの変化

漢語による強制的イデオロギー教育や学校教育の導入，そして定住村の人口において漢人が主流になったことなとにつれて，トナカイエベンキ人のコミュニケーションの手段はエベンキ語のみから漢語とエベンキ語の併用へと変わった。特に1960年代以降に生まれたトナカイエベンキ人にとって，主要なコミュニケーション手段はエベンキ語ではなく漢語となった。しかし，各キャンプ地での主言語はなおエベンキ語であった。

また生活の場の中心が各キャンプ地から定住村に変わったことによって，トナカイエベンキ人の，服装，名前などがしだいに漢化した。

4）精神世界の変化

かつてトナカイエベンキ人はシャーマニズムを中心とした精神世界をもっていた。1940年代後半から始まった中国への政治統合とイデオロギーの影響を受け，それは変化させられつつあった。しかし，人口の大半が森の中での移動生活を営んでいたため，また当時地方政府がゆるやかな民族政策を実施していたことにもよって，独自性を維持することができていた。1960年代初頭から始まった強制的な政治イデオロギーの教育，さらに文化大革命中のトナカイエベンキ人の精神世界にたいする全面的否定と破壊によって，それは崩壊した。

地方政府によるトナカイエベンキ人の従来の世界観にたいする批判，次から次へと入ってくる政治イデオロギーの強制教育などによって，トナカイエベンキ人の精神世界は混乱状態に陥り，それが親による家庭での教育機能の低下，喪失を生じさせ，さらにアルコール中毒や自殺などの問題の深刻化の一因にもなった。

5）経済の変化

1967年の「人民公社化」のプロセスの中で，トナカイエベンキ人の経済は変化させられた。ⅰトナカイと銃が集団化された。ⅱトナカイの鹿茸が商品化された。ⅲ狩猟活動やトナカイ放牧などは生産隊の管理の下で，「工分制」という分配形式が導入された。

トナカイ放牧にしても，狩猟活動にしても，変化の中でかつての経済が維持された部分があったとはいえ，トナカイエベンキ人の経済は国家，地方の経済システムに組み込まれたため，そのシステムの中でしか意味をもたなくなったといわざるを得ない。また，この時期からトナカイエベンキ人の若い世代は当時の政治イデオロギーの影響を受け，自分の親世代が営んできた経済からはなれる傾向にあった。

おわりに

1960年代に入ってから，中国の「左傾思想」の影響は政治，経済，そして日常生活までに浸透し，政治運動はつぎから次へと繰り広げられていた。「民族問題は階級闘争の問題である」という左傾思想に導かれて，民族政策，民族自治制度は破壊され，一時的には排除されたことさえあった。本論文では，「左傾思想」の嵐の中で，トナカイエベンキ人社会がどのように翻弄され，また変化されたかをトナカイエベンキ人の立場に焦点をあててみてきた。この時期を経て，トナカイエベンキ人社会は１つの独立した社会的単位としての機能を失い，細分化され，共通の利益，価値観などが生まれにくくなり，民族のアイデンティティーの喪失を招いたように思われるが，この点については，今後考察を深めて行きたい。

注：

1）この「決議」は1981年の中国共産党中央委員会全体会議（11期６中全会）で採択され，文化大革命を否定し，毛沢東の歴史的評価を行なったものである。

2）詳しくはアンタ・チャン（1989年）と聶利利（1992年）を参照。

3）思沁夫1999年，2000年(A)を参照。

4）殺害されたトナカイエベンキ人の妻と親戚は1978年に名誉が回復されたが，親戚の中で事件にたいする扱いに怒りを感じ，人を殺した漢人の幹部を法律に基づいて処罰することを訴えつづけてきた２人は文化大革命中に，１人は獄死し，１人は社会的な復帰が困難になるほどの肉体的かつ精神的な打撃を受けた。

5）「盲流」とは常住戸籍地から（許可なく）離れ，仕事や生計のために中国全国各地に出稼ぎに行く人々をいう。

6）しかし，筆者の知る限りでは，トナカイエベンキ人にこのような習慣があるという記録はない。

7）1930年代後半から終戦までの間に，トナカイエベンキ人の成人男性は日本軍に情報部隊としての訓練をさせられた。詳しくは思沁夫　1999年　P.169を参照

8）エベンキ人出身者のうち90%はトナカイエベンキ人出身の生徒であり，残りは他の地域のエベンキ人出身の幹部たちの子供である。

9）中国の農業集団化の時期に導入された分配形式である。あとで労働の質や効率を無視した悪平等を重んじたやり方として批判された。

10）トナカイエベンキ人の集団生産活動に供出した労働量に点数をつけて表すことをいう。

11）年によって多少の差はあるが，ほとんどの場合10工分は３人民元に相当する。当時としては非常に高かった。

12)「新内人党」ともいう。文化大革命当時，革命委員会は内モンゴル自治区にはウランフを党首とした中国の革命を妨げ民族分裂組織が存在するとして，激しい政治的弾圧を行なってきたが，1978年に中国共産党と政府によって弾圧された人たちの名誉が回復された。地方政府の統計によると，呼倫貝爾盟だけで政治弾圧を受けて亡くなった人は3,400人，負傷した人は8,000人，被害を受けた人は400,000人にのぼるとされている（呼倫貝爾盟民族事務局　P.529)。

引用文献

（日本文献）

アンタ・チャンなど『チェン村』筑摩書房　1989年

聶利利『劉堡』東京大学出版会　1992年

思沁夫「中国トナカイエベンキ人の社会経済変化（19世紀から20世紀前半まで)」金沢大学院社会環境科学研究科『社会環境研究』（第4号）　1999年　P.161～170

思沁夫「中国トナカイエベンキ人の社会経済変化（1947年から1960年代初頭まで)」金沢大学院社会環境科学研究科『社会環境研究』（第5号）　2000年(A)　P.173～184

思沁夫「中国・モンゴル自治区のトナカイエベンキ人のトナカイ飼育の現状」野外民族博物館リトルワールド『リトルワールト研究報告』（第16号）2000年(B)　P.1～25

（中国語文献）

敖魯古雅鄂温克民族郷『資料集（1967年～1982年)』1990年（未公開）

額爾古納右旗史誌弁『額爾古納右旗文史資料』<一>1992年（未公開）

額爾古納右旗史誌弁『額爾古納右旗文史資料』<二>1997年（未公開）

額爾古納左旗林業局「馴鹿飼養問題調査報告」1986年（未公開）

根河市档案局「敖魯古雅鄂温克民族郷档案第5号」1984年整理（未公開）

根河市史誌編纂委員会『根河市誌』内蒙古文化出版社　2000年

赧時遠など『敖魯古雅鄂温克民族郷狩猟民現状研究』1994年（未公開）

呼倫貝爾盟民族事務局『呼倫貝爾盟民族誌』内蒙古人民出版社　1997年

内蒙古自治区党校『内蒙古自治区近，現代史』内蒙古自治区党校出版社　1991年

（中国語の文献は中国語のローマ字順に並べた）